

劇団仙台小劇場公演

いつか夢のあとで



ジグソーパズルで
時を繕う
あなたでもあり
わたしでもある
あなたはだれ

石垣政裕

劇団仙台小劇場公演

いつか夢のあとで

作 石垣政裕

スタッフ

演出
舞台監督

演出助手
舞台監督助手

制作

舞台美術

音楽・作曲

音響効果

照明

衣装

小道具

登場人物

ロメークーサ

ハマムラ

ソレノプシス

フォルミカ

アネルガーテス

ザクリプト

メッソール（老婆）

クシケ（倉庫番）

カンポノーツ

タルサーツ

伝令1

伝令2

舞台は暗いまま、上手の前の地面に座り、若い女が歌っている。みすぼらしい服装、あちこち破けている。土をやさしく撫でるかのように、なつかしい響きの歌を歌う。アリの巣のような舞台。上部に廃墟が見える。

ロメークサ

あなたに会うまでの あしあとも
赤い涙で 縁どられ
ジグソーパズルで 時を繕う
あなたでもあり わたしでもある
あなたはだれ
わたしでもあり あなたでもある
わたしはだれ

どこまで話したら 夢物語に

繰り返しは 終わり

しあわせな 昨日がもどる

あなたでもあり わたしでもある

あなたはだれ

わたしでもあり あなたでもある

わたしはだれ

ロメークサ、人の気配を感じ、柱の陰に身を隠す。音楽。ソレノープ、フォルミカとともに下手から上手へと急いで歩いていく。

フォルミカ

何をおっしゃいます。このたびのいくさの勝利はすべてソレノープさまの手柄によるものと誰もが認めております。もし、ソレノープ様を認めない輩がいるとすれば悪魔の手先と決めつけ、この私が息の根も止めてしましましょう。

ソレノープ

（確かめるように）おまえがか？戦争でさえなければ、虫も殺さないようなおまえが・・・。

フォルミカ

ええ、この剣で。

ソレノープ

（笑いながら）おまえにできないことはわかっている。それに、わしが大將をつとめたとはいえ、敵が降参したのは、おまえの作戦が功を奏したからだ。素早く背後に回り、敵を混乱させてくれた。

フォルミカ

それとて、ソレノープさまの戦略のたまもの。

ソレノープ

「さま」はやめて、元の通りのソレノープと呼び捨てにしてくれ。幼なじみだ。

フォルミカ

幼いときから、一緒に育ってきたとはいえ、もはやあなたは、トント
ン拍子にこのフォルミカより偉くなられた。今度の手柄でも、今や国
王の跡継ぎとさえ噂される実力を兼ね備えてらっしゃる。

ソレノーフ

（笑いながら首を振る）いくら戦で名を挙げようとも、人には器とい
うものがある。武勇は一時で世を制することができるが、器がなけれ
ば落ちるのも早いというわけだ。それぐらいのことは私にもわかる。
（小声で）滅多なことを口にするではない。国王には幼いとはいえお
世継ぎがいっしょやる。わしは王子をたていくつもりだ。

フォルミカ

しかし、これまでのソレノーフさまの比類無き活躍はまさに、王の
・・・

ソレノーフ

（言葉を遮り）それは、戦い一夜が開けてから聞こう。火照った体
は、バランスを失い、饒舌を生み出し、災いをもたらすことにもなる
恋文を書くなら朝が一番いい。夜のうちでは暴力的な恋愛も生み出し
かねない。はっはっはっは。

カンポノーツ

（出てきて）ここにおられましたか。国王は、今度の攻撃の成功をと
ても喜んでおられます。さあ、ご報告を。

フォルミカ

（笑いながら）いいでしょう。明朝まで、この火照りが理性を加熱溶

融させなければ、あらためて綿密な計画とやらをお話・・・だれだ
っ！そこにいるのは。

カンポノーツ、剣を構える。

カンポノーツ

出てこなければ、こちらから踏み込もうか。

ロメークサ、身構えるフォルミカに恐れおののいて、恐る恐る姿を見せようとする。
しかし、現れ出たのは、黒いマントに身を包んだ老婆である。

メッソール

これは、万物の王たるソレノーフさま、ごきげんようしゅう。

カンポノーツ

（近寄ろうとするメッソールを制止し）おまえたちに、恵む物は何も
ない。

フォルミカ

城内をうろろろすると、とんでもない目に遭うこともある。さあ、立
ち去りなさい。名前はっ。

メッソール

私も役者は、自分の本当の名さえ忘れてしまうほどたくさん名前
を持っております。

フォルミカ

なんと、役者っ？

カンポノーツ

役者なんて、乞食も同然。こんな場で話を聞くのも汚らしい。

メッソール

確かに、わたしどもは根も葉もないただのお芝居を演ずるだけ。次から次へと、戦のご褒美をいただき、未来を約束されていくあなた方サムライを演じて、芝居が終わってしまえば跡形もなく忘れ去られるもの。太陽がなくなってしまうえば消えてしまいうる哀れな影。どこにいうと何をしようと、じゃまにならないエーテルのようなもの。

カンポノーツ

無礼なやつだ。

メッソール

おめでとうっ！全生物の王ソレノープ！やっとその手ですべてを操ることが出来る。全能の知の所有者よ！

フォルミカ

（少しおもしろがって）今度は何を演じているのだ。

メッソール

・・・なにも・・・素のまま。

ソレノープ

まで、今なんといった。全生物の王ソレノープだと。

カンポノーツ

こんな汚らしい、失礼な奴らに関ずらわっているは・・・

ソレノープ

わしはまだ、ほんの一つの戦いに勝ったばかりだ。「全生物の王」など賞賛の言葉にしても、あまりにもかけ離れた・・・

メッソール

（歌う）

わたしでもあり あなたでもある
わたしはだれ

ソレノープ

（不安になり、フォルミカに）ハマムラは？

フォルミカ

いつもの部屋で、北東に位置する敵の弱点を調べております。

ソレノープ

やつにも、今晚の酒宴の席に出席するようにと伝えてくれ。

メッソール

（メッソール）どうか、その役はわたくしに。

カンポノーツ

なにを、ええいつ、向こうへ行ってる。

メッソール

どうか私にふさわしい役を・・・（まとわりつく）。

フォルミカ、

金貨を投げ出す。メッソール、動きを止める。

メッソール

お金と役者と

どちらを選ぶかと聞かれたら
迷わずに こう言おう
お金を投げ捨てる
あなたの役がやりたいと

メッソール、お金を拾って消える。

ソレノープ しかし、ハمامラはどうやって・・・

フォルミカ さあ、勝利の美酒も夜が明けてしまえば、すぐまた出陣の水杯に変わってしまふというもの。国王にご報告の後は、帰りを待ちわびていた美しい奥様にもうれしいお知らせをせねば。

ソレノープ あの老婆は？

フォルミカ 消えてしまいました。泡のように。さあ。

カンポノーツ 国王がお待ちかねです。

二人去る、ロメクーサが舞台に現れる。

ロメクーサ ハمامラ？

突然、背景に動く模様が映し出される。ハمامラがコンピュータの修理をしている。うまく繋がったときは、遺伝子の配列情報が流れる。しかし、大部分は繋がらない。ハمامラが部屋から姿を消すと、ロメクーサが忍び込むように部屋に入る。ハمامラの「装置」を珍しそうに見て回る。突然ブザーが鳴り、ロメクーサ、あわててスイッチ類に触れてみるが、止まらない。とうとう毛布をかぶせてしまう。ハمامラが入ってくる。ロメクーサ、合図をする。

奥のベッドにほの暗い明かりが差す。寝苦しい夜、ソレノープのうなされている声が聞こえる。アネルガーテス、起きあがって窓に近づく、月の光が何かを誘うように強くソレノープを照らし出す。不意に、ソレノープが起きあがる。額には汗がにじんでいる。大きく息を吸う。

アネルガーテス (静かに)・・・いくさに勝利した、無敵の將軍を脅かそうというのだから夢の中にもたいした悪魔がいるものね。

静かに水をくみさしだす。

ソレノープ (息を大きくしながら)・・・いや、いつもの薬を・・・。

アネルガーテス こうして、毎夜、毎夜、うなされるたびに、あなたを悩ます悪魔を気休めの薬とともに記憶の奥に飲み下すだけ。

ソレノープ、瓶から薬を手の中にあげ、一気に飲み下す。

アネルガーテス 親から授かった明晰な頭脳をもち、これまで戦場で思う存分その資質を試すことができたあなたは、もはや一介の武将などでは無いことは自覚すべき時なのに。

ソレノープ やめろ、その話は。もう、じゅうぶん・・・

アネルガーテス だが、あなたは目前にある階段を上ろうとはせず、上を見上げては踊り場にとどまろうとする。

ソレノープ わしが、ここまで来ることができたのは、わしひとりの力ではない。フォルミカとあのハムムラという男がいなければ。

アネルガーテス あなたが言うように、戦闘になれば、あの男が敵の攻撃を食い止める方法を見つけ出し、フォルミカが力任せに敵をたたきのめすとはいっても、戦を指揮しているのはあなたなのだから、あなたが皆を鼓舞し、明晰な頭脳で群を動かしているのです。あの男たちはいわば、あなたの別々の剣にすぎないのです。剣は使う者がなければただの鉄くず。それに折れたら、すぐに取り替えられる。

ソレノープ 確かにその通りだ。しかし、わしには無くてはならない剣になってしまった。

アネルガーテス 古今東西、絶対の王となったものに立ち向かうものはたった一つ。己のこころの弱さ。油断をしようものなら、雪崩を打って崩れ落ち、どれほど強固な城壁を作ろうとも、一夜にしてすべてを失うことになるというもの。王座に登ろうとするならば、いつでもそれを切り捨てる覚悟がなければ。

ソレノープ 何を言うんだ。その通りなら、私の右腕になってるフォルミカすら疑うことになるではないか。

アネルガーテス いまのところ、あの男たちは決してあなたを裏切ったり、飛び越えようとすることはありません。しかし、可能性などというものは時間がたてばどうにでもなるもの。もっとも、飛び越えようとする者がいれば、そのときは機を先じてしまえば、それだけのことです。

ソレノープ ハムムラもまだまだ、わしにとっては必要な男だ。

ソレノープ、着替えて部屋を出る。アネルガーテス一人残る。太陽がまぶしく差してくる。ラジオの放送が聞こえてくる。地上に作られた瓦礫に光が当たる。

（「かつて、この地上をヒトという生き物が支配し、専制を敷いていたころの録音を

聞いていただきましょう。お聞きの皆さんは、まだ地上に出ればいたる所にその巨大な建造物のがれきが残っているのを目にするかもしれません。」

倉庫番

（鍵をガチャガチャさせながら歩いてくる。ここは一部、韓国語で）あのあたりは穴を掘るのももうおしめえだな。水があがってきやがった。今度は敷地の隅んどこでも掘ってやるか。掘れば掘るほど変なものばっかりでてきやがる。昔の奴らは何でも穴掘って埋めりゃいいとも思ってたのか。かみさんが、誰かが高く売れる物を掘り出したって話をどこからか聞いてきてよ「おまえさん、いいもの掘り当てたらポケットに入れておいでよ」って。どうも女は金儲け主義でいけねえ。哲学がないな哲学が。あいつらには、すきまなくピタッと棺桶が入る穴を作るなんて「穴掘りの美学」ってのが理解できねえんだな。おかげでこっちは、こんな大きなポケット拵えられてしまった。（大きなパンパンに膨らんだポケットを見せる）こんなものは市場に持って行ったって売れやしねえ。・・・売れなきゃ、かみさんが黙っていいねえだと・・・よく知ってやがる。なんで女ってやつはああなんだろうこんど穴を埋めるとき一緒に埋めてやろうか。（ポケットからいろいろなものを取り出し、観客に使い方を教えてもらう。電話機を取り出しスイッチを入れると声が聞こえる。）

電話機の声

（小声で話しているよう）もしもし、どなた？あなたは人間ですか？そこは安全なところですか？もし、まだ生きてるのだしたら、連絡を

します、もしもし・・・

倉庫番

（電話機を踏みつぶし）倉庫番たって、毎日毎日、日に三回鍵を開け閉めするだけ。こんな仕事は人間をだめにするね。俺はもう最初っからだめだったから、もってるようなもんだけど。まっとうな者にはつとまらないだろうよ。

倉庫番大きな鍵束の中から適当な方法で鍵を選び出し、鍵を開ける。ロメクーサが食事を持って入っていく。部屋には、コンピュータの部品やら、古い測定機械やらが散らばっている。その中からハママムラが顔を出す。

ロメクーサ

朝ご飯よ。その辺に落ちていた木の実からコーヒーのようなものを作ってみたの。いつかコーヒーが好きだって言ってたでしょう。古い文献を探して作り方を調べてみたの。香りはどう？

ハママムラ

（香りを確かめ、頷く。）

ロメクーサ

ねえ、飲んでみて。

ハママムラ

（一口飲み、変な顔をする。）

ロメクーサ

だめ？おかしいなあ。（自分も飲んで）なぜこんなもの、人間は飲ん

でるの？

ハママムラ
（首を振り、しかし、飲み干す。むせる。）

ロメクーサ
大丈夫。無理しちゃった？今度は別のものを試してみるわ。ハママムラさんが「これが、コーヒードって」言ってくれるまで。さあ、ほかのも召し上げれ。これはもう合格済みだから。

ハママムラ、パンのかけらをのようなものを口にくわえながら、電子基盤のようなものを取り出してくる。

ロメクーサ
金色の足がたくさんあって、きれい。これ、この間、あのおじさんが拾ってきたトランクの中にあったもの？ハママムラさんに教えてもらったところを掘ったらちゃんと見つかったって。でもこんな物は人間のハママムラさんしか価値がわからないものね。

ハママムラ、基盤を機械に差し込み、キーボードを操作する。やがて奥から、小さなケースを取り出してきて、そこから一つのサンプル瓶をとりだす。

ロメクーサ
それなめに……って聞いても、どうせわからないに決まってる。あなたのやっていることは一つもわからない。それが私たちの国に役立っていることは確かかもしれないけれど……（瓶のラベルを読み）

ファラオーニス……ふうんこれは、長年私たちの国を脅かしてきた国でしょ。ソレノープさまは最後に戦うのはあの国とだとおっしゃっていた……でも、どうしてこれを……今度はファラオーニスと戦うの？

倉庫番
その先生に頼まれてね、ちょっと隣の穴掘り仲間がいたもんで、その一つの口の裏側を綿棒でちょいとぐりぐりと……（ロメクーサに）いつもの時間には出てくださいよ。もうすぐ、お偉方が朝の話し合いにやってくる。……ところで先生そりゃなんだい？その……。

ハママムラ、サンプル瓶を機械にセットし、再びキーボードを操作する。背景の画面にTCAGの四文字の組み合わせが流れていく。

倉庫番
なんだこりゃ。目がちらちらするな。

ロメクーサ
何これ……

ハママムラ
（小さなケースの中身を指し示す）

ロメクーサ
これが……この瓶の中身？

ハママムラ
（首を振るが、また頷く）

ロメクーサ
よく見ると、四つの文字がでたらめに並んでいるだけじゃない。でも、これで何をしようって言うの……

ハママラ
（自分とロメクーサを示し、他の人をも示し、そして背景を示す。）

ロメクーサ
あなたと私たち？

ハママラ
（頷く）

ロメクーサ
これが、あなただか、私だとかがわかるの？こんな、でたらめなもので。

ハママラ
（頷く。しかし、部品が一つ足りないことを説明する。お金を渡す。）

ロメクーサ
わかるはずがないでしょ。あなたは、今難しい顔してるし……私はこんなだし……

ハママラ
（小さなプレパートを二つもってきて画面と対応させる）

倉庫番
先生はね、おれにまた別のもんを探してこいっていつてるのさ。

ロメクーサ
よくわかる。

倉庫番
長年つきあっているとね。あつ、うんってね。わかった、わかったまた探してくるよ。おらあ、墓穴を掘るより、ガラクタ集め方が忙しくなっちまってな。拾ってきたら、高く買ってくださいよ。

ロメクーサ
これを持って行って（身につけていた宝石のような物を渡す）。

倉庫番
いいのかい。まあ、先生がほしい物が埋まってる場所はいたい見当はつくんだ。明後日には手にはいるよ。カミさんがこの指輪見てびっくりして腰抜かすと、俺は看病のため一日・二日は外に出歩けねえから。（出て行く）

ロメクーサ
でも、あなたと私とがわかって、それでどうするっていつの。

ハママラ
……

ロメクーサ
他の人も？

ハママラ
（頷く）

ロメクーサ あなたは、ヒト。だから私と違うけど。あなた以外は私と違わないわ。

ハمامラ (首を振る)

ロメクーサ じゃ、私たちの中でもちがうの……ふうん。でも……わたしには、何かとんでもないことが起きるようで……。あなたは、笑うでしようけど……。これはどうしようもない、カンなの、うまく説明のつかない……。

倉庫番 (いそいで中にはいつてきて) 時間ですって。さあ、「話し合い」を。

颯爽とソレノープ、フォルミカが現れる。

ソレノープ あまり寝てないようだが、大丈夫か？

フォルミカ ハمامラは、ソレノープ様のために寸暇を惜しんで、新しい武器の開発を行っているとのこと。次の戦いに勝利すれば、しばらくは休みを与えましょう。

ソレノープ それはいい。ところで、この間話していた、奴らを壊滅させることができるという武器は本当にできるのか？奴らだけが死に絶えるという。

ハمامラ (何かが一つ手に入ればできあがることを説明する。書類を一枚差し出す)

フォルミカ この部品が手に入ることによって、宇宙衛星にバックアップされていた蓄積遺伝子データベースとの比較検索が数段早くなり、奴らを作り上げている遺伝子の分を特定することができる。そうすれば、奴らを一気に壊滅させる武器の作成が可能になる……。どうもハمامラの言葉は難しく。何のことだか、勉強しても勉強してもちゃんと理解ができません。

ソレノープ ならわしにわかつうはずはない。すべてはハمامラの胸の内にあることだから……。いずれにしてもハمامラ、おまえを信じよう。次の攻撃までは、われわれも少しずつだが力を蓄えておこう。新しい傭兵を補強しよう。三〇〇だ。

フォルミカ 承知しました。これで戦いには勝ったも同然……。実はハمامラは、我々が年老いても衰えない、あるいは敵から攻撃を受けても再び肉体を再生できる方法を見つけ出すことができるらしいんです。

ソレノープ (笑いながら) まさか……。そんなことが……。

フォルミカ ハمامラはかつて、その答えの近くまで到達したことがあるというこ

と。ロメクーサがハمامラから聞いたと教えてくれた。本当か？

ハمامラ
(頷く)

ソレノープ
敵がいなくなれば、今度は自分の古いとの戦いが始まるってことか
(笑う)。

フォルミカ
そろそろ国王様にも、彼のことを。ハمامラはここを出たがりません。
昨夜もハمامラは出席を拒んでいましたので。

ソレノープ
わかった。今朝の会見の後で、これまでの彼の功績を詳しく報告しよう。
……嘘のような話だが、不老長寿を手に入れたのは国王が
まず第一だからな。

二人去る。フォルミカ一人戻って。

フォルミカ
これでいいかね、一般の兵士ではなく、武将たちと、その奥方の髪の毛だ。これがわかるまでどのくらいかかる？

ハمامラ
(部品がそろったらという仕草。そのまま、髪の毛をサンプリングケースに入れる。)

フォルミカ
わかった。そのときまで待とう。(出て行く)

ロメクーサ、ハمامラの背後に。ハمامラ、じっと液体の中の毛髪を見つめている。

ロメクーサ
その人は誰？

ハمامラ
(答えない)

ロメクーサ
フォルミカ様はだれの何を調べたいのかしら。

ハمامラ
(答えない)

ロメクーサ
その人を「分析」しようと言うのね。私の近くの人？

ハمامラ
(答えない)

ロメクーサ
……春に花が咲き、秋にはその種子たちが羽をつけて空一面に飛び散っていく。そこには、命の不思議さがいっぱい。その種たちのいくつかに、あなたは落ちてでも発芽しないなどとわかる必要があるの？ 私たちは……

ハمامラ
(キーボードを操る。画面に「ハمامラの言葉」が映し出される。)

「重い病気には特定の遺伝子が関係するものがあって、開発の初期には、その遺伝子をこのように特定し、その人のためだけの治療や新薬の開発も可能だった。」

ロメクーサ

・・・あなたの言葉を初めてみたわ。・・・ほんとね、私、フォルミル様がこのごろ読んでいらっしゃる本を読んでみたの。あなたの仕事理解できるって話しておられたから。遺伝子・・・。親から子へ、種から種へ、伝えられ続けるもの・・・顔や身体の形、どんな風に育っていくのか、伝えられるものが文章のように読めるんだったら・・・。確かにだれでもあこがれるかもしれない。

ハママラ

「すべての生物について、すでに調べられている」

ロメクーサ

私のも？

ハママラ

「それはまだ・・・」

もし、だれかの顔の形や、その人がどんな病気になるのかがわかったとする。でも、それを他人が利用しようとしたら？

ハママラ

「だから、重い病気を・・・」

ロメクーサ

もし、将来、重い病気になることがわかったとしたら、その人をどうするの？

ハママラ

「・・・」

それに、その人だけに効くってことは、もしかしたらその人だけを殺すことも・・・なんて、おそろしいことをかんがえたらどう、あたし。・・・待って。さっきあなたが話した「可能だった」ってどういうことなの？

ハママラ

「僕のような研究者が純粹だった頃。僕たちは遺伝子を解明することによって重い病気の鎖から解放することが可能だと思っていた。そして、確かにそうだった。ある部分では。研究成果が研究者のコントロール可能だった頃までの話だった。」

ロメクーサ

・・・あなたも、それに携わった一人・・・

ハママラ

「僕たちは、毎日研究室に寝泊まりまでして、その夢を実現しようとしていた。」

ロメクーサ

・・・あなたの夢は、あなたたちを幸せにしたの？

ハママムラ 「わからない」

ロメクーサ 「……いまは、この国のためになっている。戦争のための研究を続けている。でも、この仕事はあなたが本当にやりたい仕事じゃない・……違う？」

ハママムラ 「わからない」

ロメクーサ 姿かたちがわかるっていつでも、その人が誰を愛するようになるかもわかるっていうの？

ハママムラ 「わかるという人もいた。」

ロメクーサ そんなことあなたは信じちゃいないわよね。

ハママムラ 「……ないとは否定できない。」

ロメクーサ 「ないとは否定できない」「可能性がないとは言いつれない」「否定する材料はまだ見つかっていない」……あなたが頭のいい人みんなそう。じゃあ、私は誰を愛するの？私を調べてみて？……はい、これ私の髪よ。……言ってみれば。「ハママムラを愛してないとは否定できない」って。戦争なんか、早く終わってしまえばいいのに。

ハママムラ （サンプル瓶に薬品を移しながら）「少なくとも、僕はこの国のためだと信じている。あなたのためでも……」

外が騒がしくなる。

何人かの兵が口々に、わめきながら走り去る。

ロメクーサ 何かあったのかしら……

ハママムラ （急に落ち着きが無くなる。画面の文字が消える。）

ロメクーサ どうしたの……

倉庫番 あんなに騒ぎやがって……大竜巻でも来たっていうかい。先日やっと雨漏りを直したばかりだというのに。

フォルミカが慌てて、飛び込んでくる。

フォルミカ なんと言うことだ。これほど無惨なことがかつてあっただろうか。寝室で国王が倒れている。床は血の海だ。残虐非道の輩の仕業とはいえ、それを防げなかったとは我らの落ち度。

ロメクーサ 国王さまが？

フォルミカ

いつものように、朝の会見が始まった。しかし、ドアの向こうからは、物音一つもない。いつもなら、正装に身を包んだ国王が、我々の眼前に勇姿を現すはず。しばらくの静寂の後、女官の悲鳴が聞こえた。我々は飛び出し、いつもの国王とは逆の道筋で、寝室にたどり着いた。ご家族が号泣しておられた。

ロメクーサ この後どうしたら・・・

フォルミカ 我々はあと一息で、この地方を治めることが出来るようにしている。

ロメクーサ ソレノープさまは？

フォルミカ 私より先に寝室に駆けつけていた。ソレノープ様の顔も青ざめていた。まるで・・・

ロメクーサ ……

ソレノープが家来を従えて、やってくる。

ソレノープ

ここにいたか、フォルミカ。むごいことだが、われわれは現実を受け止めよう。我々は、果たさなければならないことをやるだけだ。国王の死によって、いたずらに混乱すれば、敵の知るところとなり、敵は何倍かの力を得て、反撃してくるに違いない。すでに前線では敵方の動きが活発になってきたとの報告も入ってきている。ハمامラ、おまえの仕事を急いでもらえないか。国王を失ったあまりの大きさは、途方もないが、幾分でも装備を強固にしておかなければならない。奴らのやったことが、いかに小さいことであつたかと思わせなければならぬ。

ロメクーサ じゃ、相手方が昨夜のうちに侵入し？

ソレノープ わからないが、それを否定するだけの証拠は何一つ無い。胸に突き刺したはずの剣すらまだ見つかっていない。

ロメクーサ (驚き) 相手は剣で？

ソレノープ 惨いことだ。あれだけのことで、殺した相手も返り血も浴びていない。そうやすやすと逃げ仰せるものではない。もしかしたら、まだ城内に潜んでいるということもある。

フォルミカ (動揺して) と、とりあえず、城門を閉じておこう。城内に潜んでい

る犯人が逃げ出さないように。

ソレノープ

よし！（去る）

フォルミカ

（小声で）ハمامラ・・・ハمامラ・・・もしかしたら、しばらくあえなくなるかもしれない・・・結果は後で必ず聞く・・・、（ロメクーサに近づき）これからどんなことがあっても驚かぬよう覚悟して起きなさい。これからも、おまえはこの国にはなくてはならない仕事をしなければならぬのだ。わしにどんなことがあろうとも生き抜くのだ・・・（去る）

ハمامラ、仕事を始める。ロメクーサそれをじっと見ている。ハمامラふと振り向くとロメクーサと目が合う。

ロメクーサ

いつものフォルミカさまじゃない。私は物心ついたときからフォルミカさまのそばで暮らしていた。フォルミカさまは、私にいろいろな学問を教えてくださいました。まるで我が子のように。そのフォルミカ様が全く別人のようだった。これからどんなことが起きようというの。いつになったら、戦いは終わるの？なぜ隣の国を憎まなければならないの、殺し合いを続けなければならないの？

ハمامラ

・・・

ロメクーサ

あんなに優しいフォルミカさまも、一旦戦場に出れば、ただの兵器の一部にすぎない？ヒトと私たちだけよ、同じ種同士で殺し合いをするのは。戦の繰り返しでヒトは滅びたが、今私たちは、その愚かなヒトの真似をしようとしている。あなたのよみがえった夢が、私たちの中で、また一人歩きしなければいいけど・・・

舞台は急激に暗くなる。

ほの暗い舞台で、争いの声が聞こえる。幾人かが無言のまま走り去る。

ソレノープが疲れた様子で歩いてくる。離れたところからアネルガーテスが静かに話し出す。

アネルガーテス

あの日以来、毎晩毎晩、夜中に起き出しては中庭へと出て行く。帰ってくると死んだように、何かに魂でも奪われたかのようにベッドに崩れていく。まるで、無邪気な子供が泣きじゃくった後に、涙が枯れて自然に眠りに陥るように。すべてをどこかへ流し去って。

ソレノープ

（熱に浮かされたような）アネルガーテス・・・

アネルガーテス

昼は勇猛果敢な武将を演じていたものが、一羽の鳥によって引き落とされた夜のほとりの中では、まるで死を予感したもののような、しか

し、その自分にさえもまた脅かされ続けているような振る舞い。戦が始まったばかりの頃の精悍なソレノプシスはどこへ？

ソレノープ

（それには答えないかのように）アネルガートス……フォルミカにわしの作戦を伝えてくれ……。それから、わしが決して王位を奪ったり……。いや、それはわしが話そう……。先にやらなければやれるだけだ。

アネルガートス

フォルミカはもはやあなたの右腕ではない。右の腕が飛んできた石つぶてをよけようとして、意志とはべつの動きを呈したときから、右腕は身体とは、別な生き物としての運命の重さを背負っていくことになる。

ソレノープ

（急に大声を上げ）違つ、わしじゃない……。 （蹲る）

アネルガートス

争いに敗ける者がいれば必ず勝つ者がいるもの。もし勝者が、自らの戦いを振り返り、悪夢にうなされるなら、敗者がさらに敗者に甘んじることなしには、勝者もあり得ない。

ザクリプト

おくさま。

アネルガートス

ありがとう。それで？

ザクリプト

二人の王子は、荷物をまとめております。わたしも今晚中にこの国を出て安全なところへ……。

アネルガートス

そう。身柄を安全な場所に移動しなければね。

ザクリプト

お言葉ですが、このまま、やっかいの種を逃がしてやっては、やがてその芽が大本に育ち……。

アネルガートス

ザクリプト。

ザクリプト

はい。

アネルガートス

子供を育てたことは？

ザクリプト

いいえ、まだ。

アネルガートス

子供の考えは柔らかい。それだけ、周りの考えによって左右される。

ザクリプト

しかし、王妃は……。

アネルガートス

証拠が見つからない以上、黙っていても戦争の相手国の仕業であるこ

とに変わりはない。

ザクリプト

しかし・・・（ソレノープの方を見やる）

アネルガーテス

王妃の側には必ずおまえがいる。王妃はおまえを頼りにするだろう。おまえだって、たまにはフォルミカが落ち着かないとか、夜中に衣服を焼いていたようだとか、うわさ話だってするだろう。

ザクリプト

アネルガーテスさま・・・。

フォルミカが誰かと戦っている。ハمامラが再び画面に釘付けになっている。倉庫番が仲間とともにケーブルと基盤を届ける。

倉庫番

（酔っている）よくわからねえんだが、こんな風にガラクタが大金になるんだから、この大金はガラクタからできてるってことだ。この大金で酒を飲んじまったらガラクタを飲んだことになる。大金を飲んだのか！このポンコツ亭主！ってカミさんが怒る。豚骨じゃないですよポンコツ。ポンコツ亭主がカミさんを持ってるわけだから、カミさんはポンコツの所有者ってことになり・・・。

ハمامラ

（画面が二つに分かれ、ログイン画面が現れる。そこにパスワードを打ち込む。両側の画面が動き出す。）

フォルミカが頭に包帯を巻いている。

ハمامラ

「遺伝子識別データベースへのアクセスが可能になった。やはり衛星にバックアップデータが生きていたんだ」

フォルミカ

ほんとうに分かるのか。

ハمامラ

「九九パーセントの確率で」

フォルミカ

残りの一パーセントは？

ハمامラ

「測定結果を信じない場合」

フォルミカ

で、結果は？いつ。

ハمامラ

「ソレノープさまの命令でフラオーニス国のための開発を優先」

ロメクーサが食事を持って入ってくる。

フォルミカ

われわれのための不老長寿の薬品を開発するのが先ではないか？（独白）国王の地位につくなら、偽善も殺人もやっける男の命令に従

うというのか。

ロメクーサ

フォルミカさま・・・

フォルミカ

ロメクーサ

ロメクーサ

あんなに仲良しだったのに。ソレノープさまと憎みあうなんて。

フォルミカ

王のまえではあんなにかしずいていた男こそ殺人者そのもの。偽善の皮を脱ごうともせず、今まさに王位につこうとしている。ロメクーサおまえもよく見ておくのだ。この世の陥る先を。

ロメクーサ

でも、本当にソレノープさまが・・・

フォルミカ

ロメクーサ。おまえも聞いたはずだ。だれの口から出た言葉だ。剣で王が突き刺されたとは。

ロメクーサ

・・・。

フォルミカ

一〇中八・九殺した本人でなければ、知り得ないことだ。

ロメクーサ

・・・。

ハママラ

「ソレノープさまは・・・」「それにデータの転送と比較のために時間がいる」

フォルミカ

どのくらい？

ハママラ

「寄せ集めの部品で作ったコンピュータだ。この演算速度からすると一・二週間」

フォルミカ

（剣を抜き、ハママラを威嚇する）三日だ。三日しか余裕はない。三日後にはソレノープの戴冠式が行われる。奴らの動きを見れば分かる。その前に邪魔者をできる限り取り除こうと、すでに粛正は始まっている。

ハママラ

・・・。

フォルミカ

おまえが、今作ろうとしている武器は、正義のために使われなければならない・・・。

ハママラ

「セイギ？」

フォルミカ

何食わぬ顔をした悪魔がおまえの武器を手にしたら・・・。

ハムムラ

「セイギのために・・・」

ロメクーサ

（ハムムラに）あなたは正義のためではなく、真理のために研究をしていたのよね。それがいつの間にか、正義が悪かということで自分の仕事を決めなければならなくなった。（フォルミカに）しかし、だれが、正義であることを決めることができるの？

フォルミカ

ロメクーサ！

ロメクーサ

新しい技術を夢見た科学者は真理を見つけることに一生懸命になり、それを見つけることもできたけど、どう使われるべきかと言うことを忘れているうちに、科学者とは全く無縁の力のあるものが正義を決めることになるわ。

ハムムラ

「正義だ」

ロメクーサ

彼は何を？

フォルミカ

「彼は何を？」か。すべてをだ。、周辺諸国を打ち破り、あと一つの国を倒せばすべてを支配できるところまでこの国を強大にし、やがてこの国自信をも滅ぼそうとする。すべて、このハムムラが作り出した

武器のおかげだ。ロメクーサ、おまえには小さいときからいろいろなことを教えてきた。ただ、このところ戦に心を奪われて、おまえに一番大切なことを伝える暇がなかったことを悔やんでいる。この男たちが、無邪気に生きていた時代のことを。ヒトという生き物が、すべての生き物を支配し、それだけではもの足りなくなり、ヒト自身も支配しようとした時代があった。ヒトが滅びたときのことを。

ロメクーサ

おやめください。フォルミカさまは、そのようなことをなさるお方ではないはず。

フォルミカ

国王暗殺の汚名を着せられ、いつ寝ている間に襲われるかと逃げ回っているこのフォルミカにたいして、それでもなお冷静であれというのか。

ロメクーサ

フォルミカさまはそんなことをなさる方ではございません。ロメクーサは小さな心ながらも、フォルミカさまを信じて疑ったことはありません。

フォルミカ

ロメクーサ、おまえが信じようと信じまいと、誰が信じようと信じまいと、国王殺しのフォルミカの名は、もうすでに洪水のようにこの国の人々の心に押し入ってしまった。

ドアをたたく音が聞こえる。その声に倉庫番が答えている。

倉庫番

たたけば、いいってもんじゃねんです。金槌や鯉じゃねんですから。だれが、中にとって？あの先生が、一人でしゃべってますよ。しゃべれるはずがない？それがね、しゃべるんですよ、これがまた、・・・

カンポノーツ

うるさい、ぐずぐず言わないであけろ。

倉庫番

あけてもいいんですが、卵は踏みつぶさないでくださいよ。あんたら兵隊アリは、腕っ節は強いんだが、目がよくないときているからよく踏みつぶす。これが卵に傷ですからね。

カンポノーツ、タルサーツ剣を持って入ってくる。

ロメクーサ

フォルミカさま、お逃げください。

フォルミカ

おまえたちの新しい王にこれだけは伝えておけ。フォルミカはたとえ命が危ういとも、卑怯な手は許さないと。

フォルミカはカンポノーツ、タルサーツと戦う。しかし、カンポノーツら二人の勢いに押される。

ロメクーサ

ハママラ！

ハママラ

「その瓶を床に」

ロメクーサ

どこ？

ハママラ

（声になる）その棚の上の左から三番目！

ロメクーサが、カプセルを投げ捨てると煙が立ち上がる。フォルミカその隙に逃げようとする。よるめいて、分析機のスイッチが入る。カンポノーツ、タルサーツ追いかける。コンピュータがかってにデータベースとの比較を行っていく。

コンピュータ

「資料番号A0013 解読開始」

ハママラ

比較データの範囲DA0650～DAF859

ロメクーサ

ハママラあなた、話している・・・自分の声で・・・何が始まったの？

ハママラ

この国の遺伝子データをデータベースと比較分析するため・・・解読を・・・。

動いているコンピュータに光があたる。

戴冠式に向かうソレノープ、カンポノーツ、タルサーツら。その前にメッソールが立ちはだかる。

カンポノーツ

王位に昇ろうとする主君の行く手を阻む物はどんな者たりとも容赦はしないぞ。

メッソール

どうか私にふさわしい役を……

カンポノーツ

この間の旅役者か。いま街の中で芝居がかかっているというが……

メッソール

役者は心の言葉の翻訳者。あなたのお芝居を演じてもいい。

カンポノーツ

あいかわらず無礼なやつ！

カンポノーツ、剣に手をかけようとすると、ソレノープが止める。

ソレノープ

演じてもらおうではないか。わしの物語だと。わしの武勇の話か。この老婆が本当の役者かどうか試してみよう。

カンポノーツ

そういうことなら。（金貨を投げ与える）

ソレノープ

いいだろう、さあ始めろ。

メッソールは、物語を演じ始める。

メッソール

始まりは、この国がまだまだファオーニスの属国だった頃
満月の夜に現れた、ひとりの女
力はあるど、使う手だてを知らぬ
知恵はあるど、胸の奥にしまい込む兵士がひとり
「あなたの杖の代わりに、あたしを妻に」

命と役者と

どちらを選ぶかと聞かれたら

迷わずに こう言おう

命を投げ捨てる

あなたの後見をやりたいと

夜も日も明けぬいくさびの
祝いの酒の乾かぬうちに、とんとんとと上りでて
杖なんて、直ってしまえば捨てる物と
高をくくって、頼ってみれば
杖なしでは 巧妙な作戦も つゆ浮かばず

メッソールは杖を離そうとするが、杖がくっついてくる。杖をおいて行こうとするが、杖が先回りしてしまう様子を演じる。アネルガーテス、次第に青ざめていく。

アネルガーテス　まあ。

カンポノーツ　ええい、誰を前にして演じているのだ。

ソレノープ　まてっ！

メッソール　（踊りながら）

満月におどらされるのはいいけれど

新月の夜は　おどりに　疲れ

既朔に　不安が的中し

機望というなの　月を待つ

十六夜う　男の　背をたたき

上を見上げて　立ち待ち月

だが頂点は寝待ち月に　更け待ち月

二十三夜月に　剣をとる

うおっ！りゃっ！

有明の月から隠れるように

いま晦の夜を待つ

やがて、月見に飽いた夜に

我が世の春の月が欠け

頼みのツキにも見放され

ひとり旅行く地獄の果てに

アネルガーテス　ああっ！（憤然と出て行く）

カンポノーツ　（ソレノープをみつ）ええい、立ち去れ。

メッソール　お許しを・・・たかが、役者のお芝居、本気になさるとは・・・

カンポノーツ　二度と城内に足を踏み入れるな。

メッソール、どこかへ消えてなくなる。ソレノープの顔が青ざめている。

カンポノーツ　あんな、乞食役者のお芝居ことを気になさる必要はありません。さあ、戴冠式の場合。皆がお待ちかねです。

ソレノープ　延期しよう。

カンポノーツ 何と？

ソレノープ 戴冠式は延期だ。

カンポノーツ 何を言われます。最後に残った宿敵ファラオーニス国を攻め、我が国の繁栄を築くときと言つのに、王が空位のままでは。

ソレノープ 空位のままですむことなら……（独白）二・三年もすればあの占い婆の呪縛からも解き放たれよう。

カンポノーツ しかし。

ソレノープ 中止だ。

ソレノープ、去る。

ロメクーサが歌っている。ハمامラは落ち着きがない。

ロメクーサ 太陽の下に出るのは、何日ぶりかしら。はいはい、分析の結果は忘れて、もっと自分をブンセキして……。

ハمامラのサングラスをはずす。ハمامラあわてて取り返す

ハمامラ ……。

ロメクーサ （笑う）ほら、ね。私、占ってみようか。占いができるの。あなたの未来を占ってあげる。（地面に輪を描いて、分割し）ここが、いまのまま、おじいさんになる。ふがふが、ぶんしえきが……なんて話している。ここは仕事を忘れた風来坊になって外に飛び出す。誰かと結婚して、お父さんになっちゃう。でも、どうしてあなたは話せなくなつたの？……ま、いいか。

後ろ向きに靴を放り投げようとする。

ロメクーサ いい加減だっと思ってるんでしょ。それでも結構当たるのよ。ははん、当たったことだけ覚えてるからだって顔してる。違うって、本当に当たるって。小さいときは百発百中。ええいっ！

靴がぽんと落ちる。

ロメクーサ （後ろを振り向いたまま）ねえ、何になった。何になった？

ハمامラ、サングラスをとる。

ロメクーサ　なるほど、いいお父さんか……。あなたがヒトでなければ。あなたを愛してもよかったのに。

ハママラ　（じっと見つめる）

ハママラ、再びサングラスをかける。ロメクーサ、歌を歌う。
いつの間にか倉庫の中になっている。

ロメクーサ　（急に歌うのをやめる。）何かわかったの？

ハママラ　もうすぐ結果が出る。

ロメクーサ　結果って？

画面が、変化する。ハママラ、首をかしげながらキーボードを操作する。

アネルガーテス　なぜ、戴冠式を中止に……。なぜ戴冠式を中止に……。 （独り言のように）……。さあ、王冠を……。あなたが望んでいた……。なんとりっぱなお姿……

ザクリプト　（あわてて入ってくる）奥様……。奥様……

ザクリプト、ソレノープに止められる。

アネルガーテス　さあ、剣をとりなさい。あなたにはもう、これまでの剣は必要なくなった……。さあ……。さあ、新しい剣をとって戦うのだ……。なぜ戦わぬ……。さあ……。これではどう……。これなら王の首をはねてもまだ使える……

ザクリプト　おくさま……

再び、倉庫に光が当たる。

ロメクーサ　どうしたの？

ハママラ　フォルミカさまのいったことは本当だった。

ロメクーサ　なにが？

ハママラ　アネルガーテスは同じ種じゃない。

ロメクーサ　どういうこと？

ハママラ　念のため全生物データベースを検索すると、アリでもアネルガーテス

は寄生種の一つで・・・。

ロメクーサ
どこが

ハママラ
(データの一部を示しながら)このCAGが三〇回繰り返すところからのデータ。

ロメクーサ
・・・わかんない！

ハママラ
すぐその種類を調査してみたんだが。どうもアネルガーテスは・・・推測の域を出ないが、死んだこの国の兵士と同じにおいを作り出し、そっくりのフェロモンを分泌。気づかれないようにしてこの国の王妃になります・・・。

ロメクーサ
・・・このことをフォルミカさまに知らせなければ、ソレノープさまは・・・。

ハママラ
気づいていないだろう。でも、知らせたって、信じてはもらえないだろう。

ロメクーサ
ソレノープさまに、このことを。

ハママラ
・・・。

ロメクーサ
ソレノープさまに、このことを！

ハママラ
知らせれば、ソレノープはいまある卵をすべて葬り去るだろう。それにロメクーサ、あなたの身も危ない。

外での声が大きくなっている。

カンポノーツ
城壁を固めろ。一匹たりとも中へ通すな！

ソレノープ
カンポノーツ！

カンポノーツ
敵は数万と見られますが、まだ持ちこたえることは可能です。

ソレノープ
ファラオーニスがいつの間に。

カンポノーツ
ファラオーニスなど蹴散らしてくれるわ。

再び倉庫へ。

コンピュータ
「資料番号A0013 解読開始」

ハمامラ

比較データの範囲A09650ーA0FFFF

ロメクーサ

……今度はなに？

ハمامラ

不思議だ。あなたのデータが参照できない。

ロメクーサ

「参照できない」じゃわかんない。「あなた」って……わたしのこと。いつの間にわたしを……。私の言葉本気にしたの？私が誰を愛するかってこと調べていたの？だいじょうぶ他の人を愛したりしない！

ハمامラ

あなたは、あの人たちとは違う遺伝子を持っている。

ロメクーサ

……（急に怒り出して）そんなこと調べて、何になるって言うの。わたしがアリでなく何だって言うの。

ロメクーサ、キーボードをたたこうとする。その手をハمامラに制止される。ハمامラがロメクーサの手のひらに文字を書く。

ロメクーサ

ヒト……。あたしが……。間違っているのよ……。これ。機械だから、間違いはあるって……。

ハمامラ、キーボードを操作すると、遺伝子のスペクトルが現れる。

ロメクーサ

じゃ、あたしは……

ハمامラ

彼らの寿命は短い、おそらく、彼らが死んだ後も次の卵が孵化するまで、面倒をみるためにフォルミカに養われてきた……。

ロメクーサ

（首を振る）うそよ！私がヒトだなんて。

外が騒がしくなる。

タルサーツ、

カンポノーツがあわてて登場。そこへソレノープが登場。

ソレノープ

ファラオーニスの軍勢か！

タルサーツ

ファラオーニスの軍勢なら、我々の鉄壁の守りに引き下がったはず。今度はどうも、様子が違っています。

ソレノープ

どういうことだ？

カンポノーツ

斥候の話ではフォルミカが軍勢を率いて押し寄せてきます。周辺の諸

国を巻き込み、わが軍の数倍の規模で。

伝 令1

おそれながら、川を守っていた、わが軍の一部が敵に投降しました。

ソレノープ

フォルミカ・・・

伝 令2

「報告申し上げます。敵の軍勢は、すでにフェイドーレの丘を占拠し、いま、まさにあらたな軍団がこの城へ、一気に攻勢をかけようとしております。」

ロメクーサ隠れて聞いている。

ソレノープ

ハمامラを呼べ！急いで新しい武器を用意してもらわなければ。誰かハمامラのところへ。

アネルガーテス、入ってくる。

アネルガーテス

おのれ、フォルミカめ。あなたが、あるときフォルミカの息の根を止めておけば。

ソレノープ

なんという・・・

アネルガーテス

この場に及んでまだ、自分を滅ぼそうとする敵を憎めないとは・・・

ソレノープ

フォルミカとはわしが戦おう。

アネルガーテス

すでに我らの何倍もの群がこの城めがけているというのに・・・。

ロメクーサ、急いで倉庫に戻り、キーボードを操作する。

コンピュータ

「データを消去します。」

ロメクーサ、キーを押す。

ハمامラ

やめろ！何をするんだ。

ロメクーサ

わかったの、なぜあなた方・・・私たちヒトが減んだのか。

ハمامラ

だから、それはコントロールをしっかりと・・・

ロメクーサ

みんなそうよ。コントロールがしっかりしていれば・・・でも、ヒトの心はコントロールできないのよ。コントロールできるのは神様だけよ。

コンピュータ 「ユーザーを永久に削除しますか」

ハムムラ やめろ！

ハムムラ、ロメクーサを押さえようとするが、やめる。ロメクーサ、ハムムラを抱きしめる。

ロメクーサ

もっと愛して。人は愛することで自分を見つけるの。もう、だれも人と人との鎖を切る権利はない。ハムムラ、あなたの研究はもう終わったの。いえ、始まったときから終わっていたのよ、あなたの夢は。（もう一度抱きしめる）

ハムムラ

・・・

ロメクーサ

（キーを押す）これからは、誰のためでもないあなたのために研究するの。誰のでもないあなたのため、私たちの正義のために。愛を壊そうとするすべてと戦うために。

ロメクーサ、ハムムラを連れ出す。入れ違いにタルサーツ入ってくる。

タルサーツ

どこだ。ハムムラがいない。敵に寝返ったか。

ソレノーフ、カンポノーツ入ってくる。

ソレノーフ

ハムムラは？

タルサーツ

逃げられました。追っ手を早く。敵にハムムラを渡せば。

ソレノーフ

もう、敵の目の前まで届いているはず。こうなったら覚悟を決めよう。これも運命か、あの老婆の言うとおりだった。幼いときからの決着をつけるときがきたようだ。やつは、俺より力では勝っていた。おれも、自らの手で、やつと決着をつけよう。タルサーツ！

タルサーツ

はっ。

ソレノーフ

アネルガートスを一番奥の巢へ幽閉しろ。

タルサーツ、

カンポノーツと顔を合わせろ。

ソレノーフ

これからは、正真正銘のソレノーフがフォルミカと戦う。

ハムムラ、ロメクーサ光の中へ逃げる。ロメクーサの唄が聞こえる。戦いの音が聞こえる。

参考文献：この物語は、たぶんシエイクスピア作品「マクベス」の状況を利用してあります。
そのほかに

レイ・ノース 斎藤慎一郎 訳 アリと人間 晶文社 二〇〇〇年八月
大塚善樹 なげ遺伝子作組換え物は開発されたか 明石書店 一九九九年一〇月
ネイチャー特別編集 藤山秋佐夫 監修 ヒトゲノムの未来 二〇〇二年七月
玉泉八洲男 女王陛下の興行師たち 芸立出版 一九八四年八月
ケヴィン・デービス 中村桂子 監修 中村友子 訳 ゲノムを支配する者は誰か
日本経済新聞社 二〇〇一年七月
金久 實 編 ゲノムネットのデータベース利用法 共立出版 二〇〇二年一月
アルバート・ラスロ・バラシ 新ネットワーク思考 日本放送出版協会 二〇〇二年二月

参 考 文 献 : <http://xox.to/hideki92/moon/tukiyomi.htm>

<http://www.michihiraki.org/shirahige/tsuki/sensai.htm>

<http://aniversaries.hp.infoseek.co.jp/new/001/00002.htm>

<http://www.sv.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~deb10/termite/termite.html>
<http://www.sv.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~deb10/termite/digest.html>
http://ant.edb.miyakyo-u.ac.jp/INTRODUCTION/ari_1/01.html
<http://www.hotwired.co.jp/news/>